

煎茶－中国古銅器と日本・中国の文人文化－

SENCHA : Chinese Bronze and Bunjin Culture in Japan and China

田畑潤

Jun Tabata

はじめに

平成 27 年度企画展「煎茶－山本梅逸と尾張・三河の文人文化－」で展示した煎茶具の中には中国古代の青銅器を模したものがいくつみられる。白釉鼎形火炉（大田垣蓮月・図録 No. 43）、青磁三足香炉（龍泉窯・図録 No. 163）、白磁鼎式香炉（徳化窯・図録 No. 164）、青磁龍文耳付瓶掛（川本栞吉・図録 No. 221）、染付唐草文耳付鼎形香炉（川本栞吉・図録 No. 238）は肉を煮る鼎を、南鐔鳳首盃式湯鐘（二代秦蔵六・図録 No. 115）は水や酒を注いだり香料と酒を調合したりする器である盃を、釉裏紅龍文觚形瓶（景德鎮・図録 No. 137）は飲酒器の觚を祖形としているものである。このように中国古銅器の意匠を取り込んだ器が本来の礼器としての用途とは異なり、火炉、香炉や花器として煎茶席に飾られているのである。

本展覧会で取り上げた山本梅逸は、煎茶文人趣味に暮らした人物としても有名で、古器のコレクションをまとめた『青娛帖』（図録 No. 183）の中には中国古銅器を並べた様子が描かれている。また、明治時代の茶会において中国古銅器が煎茶席や展観席に飾られていることが『淇水翁薦事図録』（中埜又左衛門・図録 No. 215）などの茗讌図録から読み取れる。本論では明治・大正時代の煎茶席に飾られ、日本、中国の文人に愛された中国古銅器を取り上げ、その定義と分類、中国における展開と日本の煎茶席に登場する様相について述べていく。

1. 中国古銅器の定義

「中国古銅器」という名称について、古代の青銅器とそれを模倣した倣古銅器に分けられ、「古代」についても通称三代と呼ばれる夏殷周の時代と秦漢時代という区分が一般的に用いられる。

夏殷周青銅器：夏・殷・周（西周・春秋・戦国）時代の青銅器。中国最初の王朝とされる夏王朝に比定される河南省偃師市二里头遺跡から出土した青銅爵が最も古く、夏代青銅器と設定することができる。殷代に入ると青銅器は本格的に製作され、特に殷代後期から西周時代に最盛期を迎える。春秋・戦国時代の青銅器については器種・器形・紋様及び製作技法などの違いから春秋青銅器、戦国青銅器と分けて捉えられ、また諸侯国ごとに性格が異なっている。青銅器は用途にとって大きく食器・酒器・水器・楽器に分類され、神や祖先を祀る祭器として、また所有者が亡くなった後に副葬品として墓におさめられる。周代には礼器（祭器）として、その器種構成や数量などから身分秩序を示す指標として用いられる（図 1）。周の天子を筆頭に諸侯・卿・大夫・士の序列が鼎と簋の数量によって区別され、鼎の内容にも牛・羊・豚などの優劣が存在したことが、中国古代夏殷周時代の礼制をまとめた『周禮』『儀禮』『禮記』、いわゆる三禮から復元されている。

秦漢青銅器：秦の中国統一後、周の礼制は完全に否定され、青銅器の役割、器種構成、紋様などが大きく変化していく。若干残された鼎や壺など礼器を踏襲したものがみられるほか、土器や陶器、漆器にその位置を譲る。礼器の多くは日常雑器へと姿を変え、釜や燗炉など新たな器種が出現する。

・「倣古銅器」

「倣古」の意味は文字通り古に倣うことを指すが、本論で扱う「倣古銅器」について、主に三代（夏殷周）に倣ったものを基本として、そこから派生したものも含めて分類を行う。陳芳妹氏（金立言訳）は Jessica Rawson 氏の三種の復古現象を引用し、「再創造的なもの」（Recreation：古物本来の用途、器形、紋様を知るために意識的に模倣すること。）、「骨董的なもの」（Antiquarianism：偽物を作ることを目的にしていること。）、「倣古的なもの」（Archaism：別の材料をもって銅器を写した作品）とまとめている（陳 2007、Jessica 2004）。また、八波浩一氏は、上記論文を取り上げ、古代復古の方法には同じ素材を用いて古代そのままの復元を試みる「再現」と、青銅器の特徴をおさえつつも、異なった素材を用いて新しいものを創造する「倣古」とがあった、とまとめている（八波 2012）。「倣古」の定義を別素材と限定してしまうと「倣古銅器」の意味に混乱が生じるため、本論では「倣古銅器」に新たな定義を設定する。

宋元代倣古銅器：宋元代倣古銅器は、大きく「宋元倣殷周（春秋・戦国・秦漢）青銅器」、と「宋元新出倣古銅器」に分けられる。「宋元倣殷周（春秋・戦国・秦漢）青銅器」については、殷周（春秋・戦国・秦漢）青銅器本来の器形・紋様を意図的に模倣した倣古銅器（註1）と、殷周（春秋・戦国・秦漢）青銅器の器形・紋様の一部に宋代以降の新要素を加えたものに細分することができる。「宋元新出青銅器」は、殷周（春秋・戦国・秦漢）青銅器の器種を基礎としているが、その時代にみられない型式を採用したものを指す。

・明清代倣古銅器

明清代倣古銅器についても上述と同様に、「明清倣殷周（春秋・戦国・秦漢）青銅器」、と「明清新出倣古銅器」に分けられ、さらに宋元代に出現した「宋元新出青銅器」を継承・模倣した「明清倣宋元倣古銅器」もみられる。

2. 中国古銅器と皇帝・士大夫階級・文人

・倣古銅器の出現と展開

漢代の頃、殷周青銅器は吉祥の象徴とされ、鼎の発見は元号を変えるほどの大事とされた（註2）。しかし唐から五代の間、殷周青銅器はまれに世に出現しているものの、およそ「怪異の境」のものとして認識され、北宋の歐陽脩による『集古録』には、「山崖廢墟や墓に打ち捨てられ、收拾もされない」という悲惨な状況で無視されていることが知られ（註3）、宋代の初め頃になっても同じ状況が続いていた（陳 2007）。

漢代以降、長らく中国古代の青銅器が顧みられなかった状況下、宋代初期の士大夫階級が新たな価値観を見出した。宋代の士大夫階級は、難関試験である科挙の合格者であり、比較的裕福な地主の出身者などの社会的上層階級にあった。科挙において四書・五経が必須科目であり、伝統的な儒教の考えからは儒家の創設者である孔子に重点が置かれている。孔子は宋の時代から遡ること 1500 年前、春秋時代の魯国出身で、周初の時代を理想とし、弟子を従え十数年間諸国を歴遊した。諸侯に徳の道を説き、そ

の言葉をまとめた『論語』は四書の一つになった。宋代以降の文人達の目指す先にいる孔子にとって、さらに500年近く遡る西周王朝を建国した武王の弟で、2代成王の摂政となった周公旦は夢にみるまで羨望していた人物であった。周公旦は孔子の出身である魯国を建国したとされ、また儒家の基礎は周公旦治世の礼制にあるとされる。孔子と周代礼制、青銅器との関係が、出光美術館所蔵の「孔子一代図巻」にみることができる(図2)。漢高帝が孔子を祀っている図であり、祭壇には青銅器と、犠牲である牛・羊・豚が並び、周代列鼎制度が反映されている。

宋代以降の士大夫階級は儒家の復興を目指し、儒教のもととされていた周の時代の礼制の象徴である古銅器を収集した。孔子が憧れる周の礼制、そしてそれを具現化した殷周青銅器はまさに宋代士大夫階級が追い求める器物であった。青銅器に鑄込まれた銘文から想起させられる三代の知識は、器を通じて史書の誤りを正す面においても大きな役割を果たしてきたのである。そして劉敞、蘇東坡などの科挙合格者である士大夫階級、文人が中国古銅器の収集者となっていった。

徽宗皇帝の時代、三代礼制の復古運動が最盛期を迎えた。徽宗皇帝は強大な政治力と財力を駆使し、自ら三代の銅器の最大のコレクターになったばかりでなく、当時の銅器の復古にも力を入れ、その最大のスポンサーにもなり、その庇護のもと「倣古銅器」が製作された。また、宋代において、金石学、青銅器研究がはじまり、劉敞の『先秦古器図』、呂大臨の『考古図』、徽宗皇帝のコレクションが収められた王黼の『博古図』などの図録が編まれ、器形と銘文の解釈が記述された。

元代において科挙が廃止されたのちも、倣古銅器は制作され続け、殷周青銅器に対する価値観も継承されていった。続く明清時代における倣古銅器の様相についても同様である。明の最盛期とされる5代宣徳帝は芸術方面に長けており、勅命により「大明宣徳年製」のある青銅器・倣古銅器を制作している。また、清の6代乾隆帝も青銅器収集及び研究に力を入れた人物で、宮中に所蔵された青銅器をはじめとした文物をまとめた『西清古鑑』が梁詩正らによって編まれた。『陶齋吉金録』は、清代末期の官僚で青銅器の大コレクターでもある端方が著したものであり、200点を超える殷周青銅器が収められている。これら図録には殷周青銅器をはじめ、宋元代倣古銅器が収録されており、皇帝を筆頭に官僚、士大夫など上層階級が青銅器収集をしていたことがわかる。

・宋元、明清における「倣古」観

楊美莉氏は台北故宮博物院所蔵の倣古銅器を分析し、「倣古」における重要な要素である「古色観」について言及している(楊2005)。宋元、明清期に制作される倣古銅器において、三代青銅器の器形・紋様だけでなく「古色」も重視された。三代青銅器は長年地中に埋もれ、偶然の発見や盗掘などにより、千年以上経って地上に姿を表す。そのため錆に覆われ本来の黄金や銀に近い銅の色調は失われている。ただし宋元、明清においては経年劣化や錆の色調が時間、歴史の尺度ともなり、「倣古」の重要な要素にもなっている。

中国宋元代、明清代の「古色」観として、「蠟茶色」という表現が用いられる。青銅器が長年地中にあり、腐食した褐色を指す表現であるが、倣古銅器を制作するにあたり、新たに作られる青銅器にこの「蠟茶色」を付ける技術が生み出された。古くは宋の時代、青銅器の表面に明礬や礬素、緑青などを塗り、水に浸して定着させる「寒法」が生み出された。比較的簡単な技術ではあるが、表面処理が細部まで行き渡らない器物もみられた。一方、「温法」と呼ばれる着色技術が元代に出現する。「温法」は、青銅器の表面に「古色」を載せた後、加熱の工程を加えることで、定着の強化、器表面との一体化を図る複雑化

した技術であり、明清時代の倣古銅器に継承されていった。明の宣徳年間には宣徳銅器と呼ばれる古色を持った青銅器が制作されている。これは青銅器を胆礬の温湯溶液に漬け、取り出して加熱処理を繰り返すことで赤みを帯びた古色を出すものである。

また、明代後期の高濂が著した『遵生八牋』第十四卷「燕閑清賞牋」の新鑄偽造の項には、上記に挙げた「古色」を付ける原料のほか、古銅器にみられる斑点状の錆の痕跡を指す「古斑」を付ける技術についての記載もみられる。「古色」を付けた後、白蠟、藍銅鈹、孔雀石（マラカイト）、硫化鉄鈹や紅色樹脂などを用いて「古斑」を付けることで「倣古」観を出すものである（註4）。このような「倣古」観は宋代士大夫階級にはじまり、明清の文人に三代の歴史を想起させるものとして好まれ発展していった（註5）。

・倣古銅器の役割

殷周青銅器は宋代の儒教のなかで倣古銅器として再生されると同時に、仏教や道教の中でも役割を果たした（陳芳妹 2007）。仏教寺院において、香炉は鼎式三足炉へと変化し、鼎や簋は信仰の対象になり、倣古銅器にみられる紋様表現の中には仏教由来の蓮華紋や忍冬唐草紋が出現する。また、道教の脈絡から古銅器を捉えると、易学の視点から八卦紋様が倣古銅器に取り入れられ、世俗的な部分は人物文、花鳥文、吉祥文にみられる。殷周青銅器を忠実に倣う一方で、当時の世相を倣古銅器に取り込み、新たな価値観を構築していくのである。

宋代以降の士大夫階級は、古銅器を机や棚に並べ、古代への思いを表現した。塚本麿充氏は、絵画表現から中国文人が持つ青銅器への意識を分析している（塚本 2010）。北宋後期の文人画家である李公麟の『孝経図』には、人物とともに青銅器が礼制にならった祭器として描かれており、想像上の三代が表現されていることがわかる。また、元代の「倪瓚図」においては、文人画家である倪瓚の傍らにある机の上に青銅罍が飾られており、鑑賞道具としての青銅器の最古の表現とされる。明代中期の杜堃による「玩古図」には、倣古銅器の数々を机に並べ、鑑賞する様子が描かれており、画中の文人の趣味や古代に対する見識の高さを象徴するものとして表現されていることが指摘されている。同じく明代中期の仇英「人物故事図冊」第5図「竹園品古」には、蘇東坡ら文人が、煎茶を楽しみながら数多くの中国古銅器や書画を鑑定している場面が描かれている（図3）。中国において文人文化の理想的モデルとして青銅器が文人とともに描写されている点は注目に値する。

このようにして中国古銅器は、中国文人の中で儒教とその先の周代礼制を具現化した器物としてはじまり、はるか殷周時代の歴史を想起させる「古色」観が重視されていたことがわかる。宋代において、復古の目標として掲げられた儒教を基礎に、まず青銅器本来の性格である祭器として捉えられていた。宋代以降、明清期を通じて、仏教、道教および民間信仰の中へと再生されていく過程で、仏具としての要素や世俗化した倣古銅器が出現する。やがて文人書斎へと飾られるようになり、ステータスシンボルとしての意味を持つようになっていくのである。

3. 茗謙図録にみられる中国古銅器

日本における中国古銅器として、主に江戸時代後期、幕末にはじまり明治時代に隆盛した茗謙図録から、中国古銅器とりわけ殷周青銅器及びその倣古銅器を抽出し、煎茶席における機能や展開をまとめていく。

・江戸時代後期、幕末にみられる中国古銅器

前述した山本梅逸の『青婬帖』(1844(天保15・弘化元年)年)にみられる中国古銅器が煎茶飾りとして記録された最古の事例と考えられる。蓮池を臨む亭内の卓に並べられた中国古銅器の図(図4左)には、右前方に方鼎、前方中央に匱、その後方二列目右に卣と左に甗が、三列目右から觚、円鼎、爵、後方右側に方壺がみられる。また、台座の上に置かれ香炉として用いられた円鼎のみられる図(図4中央)や、如意や払子が挿してある尊の図(図4右)もみられる。図から断定することは難しいが、江戸時代後期という時代背景、器形や施文された紋様、細部の形状などから推測すると殷周青銅器を模した倣古銅器と考えられる。おそらく江戸時代後期と同時代である清時代あるいは明時代に制作された「明清倣殷周青銅器」であろう。

梅逸が古稀を迎えた1852(嘉永5)年に、京都八坂耕雲閣において開催された茶会をまとめた『茗讌品目』には、煎茶席に飾られた器物の図とともに情報が記載され、古銅を冠する器物が散見される。第一席には水曹(槽)水指に古銅獸耳素鍔があり、『博古図』に記載されている壺口に似るとあるが、図から器種及び倣古銅器であるかの判別は難しい。第二席の花餅(瓶)には古銅戟耳觸紋尊、第三席には香爐(炉)に古銅嵌銀方鼎、花餅(瓶)には古銅戟耳瑞草紋尊、第四席の花餅(瓶)には古銅嵌銀尊が飾られている。銀を象嵌する技術は殷周青銅器にはみられず、倣古銅器の可能性が高い。また、瑞草を紋様に取り入れたものについても明清倣古銅器であると考えられる。次席の花餅(瓶)には古銅圓絡壺が飾られている(図5)。『博古図』記載のものと大同小異とあり、図からの推測ではあるが、戦国時代の同型の壺を基にした倣古銅器である可能性が高い。『青婬帖』及び『茗讌品目』から、「明清新出倣古銅器」のほかに「明清倣殷周(戦国)青銅器」がみられることから、梅逸が中国古銅器の中でも中国文人が最も好む三代への理解が深かったことが想像される。

・山中吉郎兵衛(簪篁)と住友吉左衛門(春翠)

明治に入ると煎茶席に飾られる中国古銅器の中に、倣古銅器だけでなく殷周青銅器をはじめとする古代の青銅器が確実にみられるようになり、その中心にいた人物として「煎茶の驍将」山中吉郎兵衛(簪篁)と「煎茶の総大将」住友吉左衛門(春翠)が挙げられる。両者が関わる明治・大正時代の茗讌図録を中心に、中国古銅器の展開をみていく。

山中吉郎兵衛(簪篁)は、大阪天満宮の二代目山中吉兵衛の次男吉郎兵衛として生まれた。長男三代目吉兵衛が天満にいたことから天山、吉郎兵衛が北浜の角の店から角山、娘にむかえた養子である與七が高麗橋一丁目に住んだため高山と呼ばれた。山中吉郎兵衛(簪篁)は明治・大正の大茶人との交際や取引を行い、1900(明治33)年に合名会社山中商会を設立し、初代社長に就任している(山本2008)。

1874(明治7)年、父山中吉兵衛の追善供養の煎茶会が大坂綱島で青湾茶会が開かれ、その内容が『青湾茗讌図誌』として1876(明治9)年に刊行されている。第一席の会主をつとめた山中吉郎兵衛(簪篁)は、花餅(瓶)に商史卣を(図6)、爐(炉)に古銅鼎を用いている(図7)。前者は『博古図』に、後者は『西清古鑑』に同型のものが記載されているとある。絵画表現であるため断定はできないが、明治前半期という時代背景、器の細部や銘文などから、殷周青銅器をかなり忠実に模した倣古銅器であると考えられる。ただし、宋元期か明清期かの判別は困難である。

殷周青銅器をはじめ、中国第一級の文物が日本や欧米に流出する契機となった事件が明治後半期に勃発する。中国清朝末期の1900(明治33)年、義和団の排外運動を契機に、清が欧米列強に宣戦布告し

た義和団の乱は、わずか2ヶ月ほどで八か国連合軍により首都北京・紫禁城が制圧された。貴族や官僚の邸宅から多くの美術品が略奪され、欧米、日本に流出した。また、その11年後の1911（明治44）年には辛亥革命が起こっている。清打倒と共和制国家樹立を目指した民主主義革命であり、またもや清朝の秘宝が略奪、搾取され皇帝、皇族も売却を余儀なくされる事態に陥った。翌1912（明治45）年には、山中定次郎による恭親王コレクションの買い付けが行われており、清の皇族のコレクションが日本、欧米に売却されている。山中商会が中国北京に正式に支店を構えたのは1917（大正6）年とされるが、義和団の乱前後には中国美術の仕入れの拠点として北京に出張所があったとされている（朽木2011）。

これら中国一級文物が海外に流出した事件の前後、明治30年代に第15代住友吉左衛門（春翠）は、中国古銅器のコレクションを充実させている。住友吉左衛門（春翠）は、中国的教養を持っていた実兄である西園寺公望、または春翠号を授けた篆刻家小林卓斎の影響を受け、中国古銅器を煎茶席に導入した代表的人物である。そのはじめは義和団の乱から2年後の1902（明治35）年に開催された十八会とされる。山中箬篁が世話人となり、松本重太郎（双軒）、藤田伝三郎（蘆庵）、村山龍平（香雪）、上野理一（有竹）、嘉納治兵衛（鶴堂）など、関西の数寄者18名が集まり各人所蔵の美術品を茶会で展示したものである。錚々たる顔ぶれに太刀打ちすべく住友吉左衛門（春翠）は殷周青銅器18点を展示し、十八会のメンバーを驚かせたとされる（外山2015）。

1908（明治41）年、大阪網島澱江一帯において山中箬篁堂の主人であった高山箬篁の4回忌の供養として煎茶会が行われ、翌1909（明治42）年にコロタイプ印刷による『澱江茗讌図録』が刊行された。第三席の煎茶席では花餅（瓶）に古銅器がみられる（図8左）。殷周青銅器の觶形尊の形状を呈しており、表面処理の状況からか、本文には水銀銅尊とある。また、第七席の煎茶席にも花餅（瓶）として古銅器がみられ（図8右）、本文に水銀銅饗養雲雷紋壺とある。中国動乱による第一級文物海外流出の後の茗讌であり、殷周青銅器である可能性が高い。

1919（大正8）年、大阪網島で山中吉郎兵衛（箬篁）の3回忌の茗讌が行われ、1922（大正11）年に『角山箬篁翁薦事図録』が刊行された。住友家（住友吉左衛門（春翠））が藤田氏旧邸洋館において、第九席「支那陶器陳列」、第十席「古銅器陳列」を担当している。「古銅器陳列」の具体的な陳列方法については不明であるが、器物の図からは現在泉屋博古館に所蔵されている住友コレクションの殷周青銅器が特定できる。例えば虎卣（図9左）と象文兕觥（図9中央）は1903（明治36）年、鷗鴞卣（図9右）は翌1904（明治37）年に購入していることが知られる（泉屋博古館2002）。

1925（大正14）年には、大阪美術倶楽部において、昌隆社の結成50周年を記念した茗讌が開催され、翌年刊行された『昌隆社記念茗讌図録』の第九席には銅器陳列がみられる（図10）。『角山箬篁翁薦事図録』に掲載された虎卣をはじめとした住友コレクションや、嘉納治兵衛（鶴堂・白鶴美術館）所蔵の尊や藤井善助（藤井有鄰館）所蔵の卣など日本国内有数の殷周青銅器が一同に並べられている。また、煎茶飾りとして殷周青銅器が用いられていることが写真によって確認できる。第十二席では殷代後期から西周前期と考えられる周銅魯公觚が花瓶として飾られている（図11左）。第十三席では漢銅爵と称されている爵に線香が立てられ、香炉として飾られている（図11中央）。続く第十四席でも漢銅伯和匜とある兕觥の蓋があげられ、器に花が活かされている（図11右）。漢代とされた爵と兕觥について、当時の分類において紋様の精粗やそのモチーフから年代を決めるきらいがあるが、研究の発達した現在の基準からみると両器ともに殷周青銅器とみなすことができる。

煎茶席において鼎・鬲・簋などの食器が火炉として、尊・觚・盃・甗・卣・兕觥などの酒器が花器として、温酒器の爵が香炉として用いられ、また展覧席に陳列されていることが茗謙図録から読み取れる。以降煎茶熱は陰りをみせ、『昌隆社記念茗謙図録』を最後に茗謙図録はみられなくなり、大正期には住友吉左衛門（春翠）も煎茶から抹茶へと移行している。煎茶衰退の直前に開かれた茗謙において殷周青銅器が飾られたことは興味深い。

4. 中国古銅器と日本・中国の文人文化

中国文人にとって、中国古銅器は理想化された三代を体現するものとしてはじまり、儒教の精神から祖先を祭祀する器としての役割についても認識していた。さらに時代を経て仏具としての役割が与えられ、紋様には仏教や道教由来のものが施された倣古銅器も出現した。中国宋代以降の士大夫階級、文人たちの憧れは孔子（儒家）であり、さらにその憧れは周公旦（周の礼制）であった。日本においては山本梅逸などの一部の文人を除き、中国古銅器が示すその憧れは遡っても宋代あるいは当代中国の文人であったと考えられる。

中国古銅器は、宋代以降に将来品として平安貴族や鎌倉以降の將軍家や大名家にもたらされた。日本に輸入された唐物としての中国古銅器の多くは仏具として、また茶道具としての役割が強く、茗謙図録にみたように香炉や花器に用いられていた。中国文人にとってのステータスシンボルであった中国古銅器は、日本文人にとっては中国文人への憧れを示すものであった。それを示すように、中国文人と中国古銅器は同じ場面に描かれるのに対し、日本文人と中国古銅器がともに描かれる絵画表現はみられないのである。宋代以降の士大夫階級、文人が儒教を基礎にし、中国古銅器を祭器やステータスシンボルとしているのに対し、日本においては仏教という強いフィルターが存在していたこと、道具商や財閥が煎茶席に飾っていたことから仏具や鑑賞器物としていたという違いを見出すことができるのである。

謝辞

本文は、平成28年3月27日に愛知県陶磁美術館において開催された煎茶道賣茶流第97回教授者会で発表した内容をまとめたものである。平成27年度企画展「煎茶—山本梅逸と尾張・三河の文人文化—」を開催するにあたり、貴重な作品のご出品及び多大なるご協力を賜るとともに、本文を執筆するにあたり茗謙図録をご提供いただいた煎茶道賣茶流高取友仙窟氏に深く感謝の意を表します。

註

- 1 銘文など宋元代に制作されたことが明確な倣古銅器を指すが、殷周（春秋・戦国・秦漢）青銅器の偽物を作ることを目的とされたものも含まれる。
- 2 『漢書』武帝本紀「元鼎元年夏五月…得鼎汾水上。」顔師古注「應劭曰、得寶鼎故、因是改元。」
- 3 『集古録』「散棄於山崖墟墓之間、未嘗收拾」
- 4 『遵生八牋』第十四卷「燕閑清賞牋」新鑄偽造「…其偽製法。鑄出別摩光淨。或以刀刻紋理缺處。方用井花水調泥礬浸。一伏。時取起。烘熱。再浸再烘。三度為止。名作脚色。候乾以礬砂。胆礬。寒水石。礬砂。金絲礬。各為末。以青鹽水化。淨筆蘸刷三兩度。候一二日洗去乾又洗之。全在調停顏色水洗功夫。須三五度方定次掘一地坑。以炭火燒紅。令遍。將嚴醋潑下坑中。放銅器入內。仍以醋糟糞之。加土覆實。窖藏三日取看。即生各色古班。…」
- 5 前述の倣古銅器について、制作された年号や該当時代における明確な特徴を持つもの以外、特に忠実に殷周（春秋・戦国・秦漢）時代の青銅器を模したものについては宋元・明清の判別は困難である。ただし、「古色」の技術などの分析により解明していく問題であるといえる。

参考文献

日文

- 一般財団法人文人画研究会 2015 『『茗讌品目』解題』一般財団法人文人画研究会『別冊 読画塾 賣茶流家元友仙窟開創 100 周年記念特集 / 山本梅逸茗讌品目の世界』
- 漆原拓也 2015 「文人煎茶の盛衰」（法政大学博士学位論文）法政大学学術機関リポジトリ
- 王牧（久保智康・廖佐恵訳）2010 「中国南方地域における宋・元期の倣古青銅器」久保智康編『東アジアをめぐる金属工芸 中世・国際交流の新視点』勉誠出版
- 大阪市立美術館 1997 『文人のあこがれ、清風のこころ 煎茶・美とそのかたち』
- 小田部英勝 2008 「中国史における「文物」－その受容と展開－」『仏教大学大学院紀要』第 36 号
- 朽木ゆり子 2011 『ハウス・オブ・ヤマナカ－東洋の至宝を欧米に売った美術商』新潮社
- 久保智康 2010 「中世日本における倣古銅器の受容と模倣－唐物意識の内実」久保智康編『東アジアをめぐる金属工芸 中世・国際交流の新視点』勉誠出版
- 財団法人 泉屋博古館 2002 『泉屋博古 中国古銅器編』
- 齋藤康彦 2009 「近代数寄者の地域的展開」『山梨大学教育人間科学部紀要』第 11 巻
- 高取友仙窟、森田聖子、小林詔子 2015 「文人茶席対談「梅逸の茶席」（総集編）」一般財団法人文人画研究会『別冊 読画塾 賣茶流家元友仙窟開創 100 周年記念特集 / 山本梅逸茗讌品目の世界』
- 陳芳妹（金立言訳）2007 「追三代於鼎彝之間－宋代の「考古」から「玩古」への展開について－」『美術研究』391 号
- 塚本麿充 2010 「宋・元画なかの器物表現－画中の古物表現とその意味を中心に」久保智康編『東アジアをめぐる金属工芸 中世・国際交流の新視点』勉誠出版
- 富田昇 2002 『流転 清朝秘宝』日本放送出版協会
- 外山潔 2015 「第 I 部 邸宅美術館の夢 文人への憧れ」公益財団法人泉屋博古館『住友春翠』
- 廣川守 2009 「殷周の青銅器」根津美術館『鑑賞シリーズ 10 殷周の青銅器』

文人画研究会 2008 『青娯帖 梅逸の茶会席図案』

八波浩一 2012 「悠久の美をめぐる―唐物茶陶から青銅器まで」 公益財団法人 出光美術館編 『悠久の美をめぐる―唐物茶陶から青銅器まで―』

山本真紗子 2008 「美術商山中商会―海外進出以前の活動をめぐって―」

茗讌図録（時代順）

山本梅逸 1852 『茗讌品目』

山中箬篁堂 1875 『青湾茗讌図誌』

中埜又左衛門 1894 『淇水翁薦事図録』

山中箬篁堂 1909 『澗江茗讌図録』

山中吉郎兵衛 1922 『角山箬篁薦事図録』

昌隆社 1926 『昌隆社記念茗讌図録』

中文

陳芳妹 2001 「宋古器物学的興起與宋倣古銅器」 『台灣大學美術史研究集刊』 2001 年第 10 期

楊美莉 2005 「晚明清初倣古銅器的作色―以銅器、玉器為主的的研究」 『故宮學術季刊』 第 22 卷第 3 期

朱鳳瀚 2009 「第二章 青銅器的發現与研究史 第一節 兩漢至清代青銅器的發現与研究」 『中国青銅器総論』（上）上海古籍出版社

英文

Jssica Rawson 2004 'Novelties in Antiquarian Revivals: the Case of the Chinese Bronzes' 『故宮學術季刊』 第 22 卷第 1 期

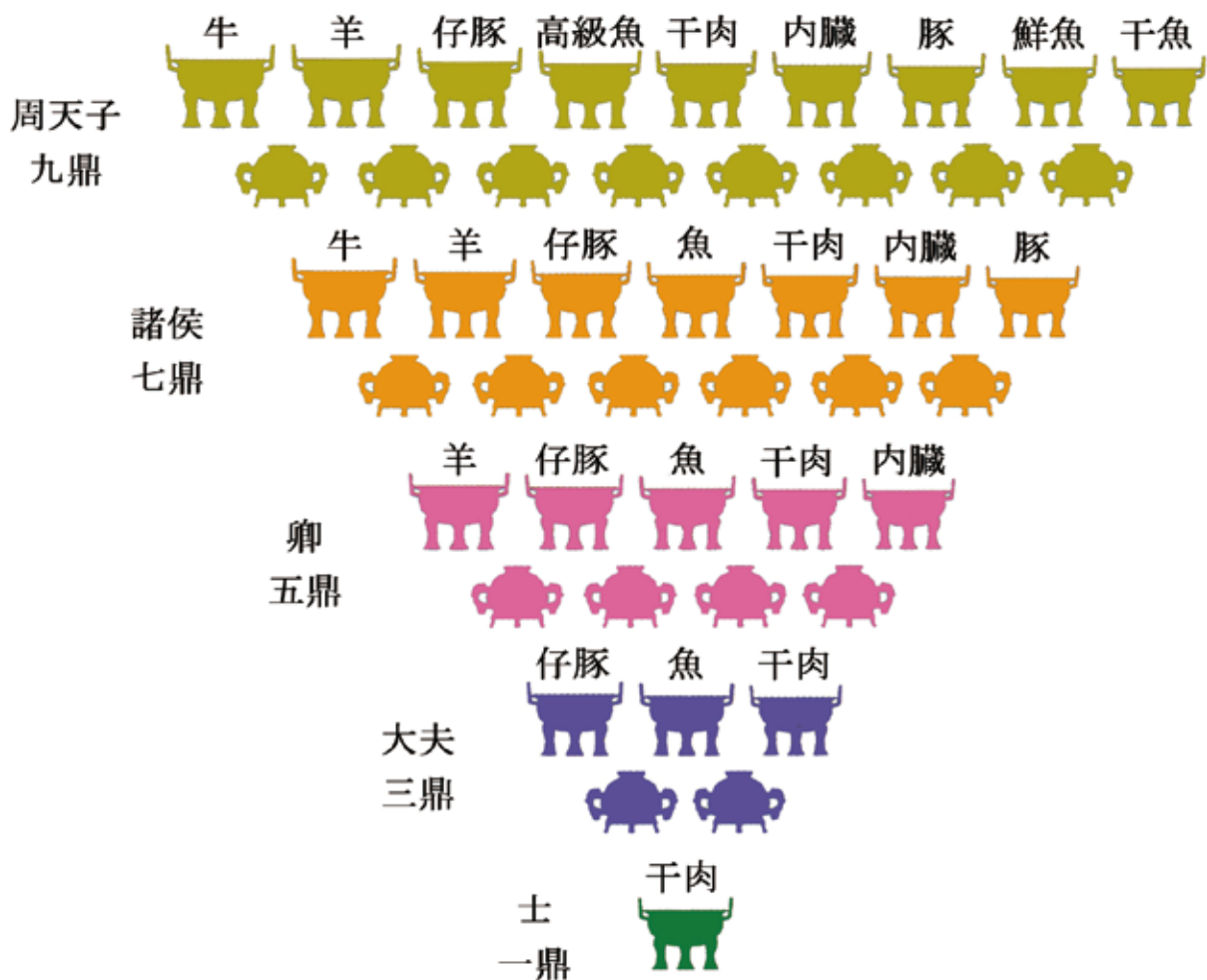


図1 周代列鼎制度概念図（筆者作成）



図2 清 伝孔貞雲「孔子一代図卷 漢高帝祀太牢図」
（『悠久の美をめぐる—唐物茶陶から青銅器まで—』
出光美術館，2012年）



図3 仇英「人物故事図冊」第5図「竹園品古」（部分）
（『世界美術全集東洋編 第8巻 明』小学館，1999年）



図4 「青婬帖」にみられる中国古銅器（「青婬帖」山本梅逸, 1844年）

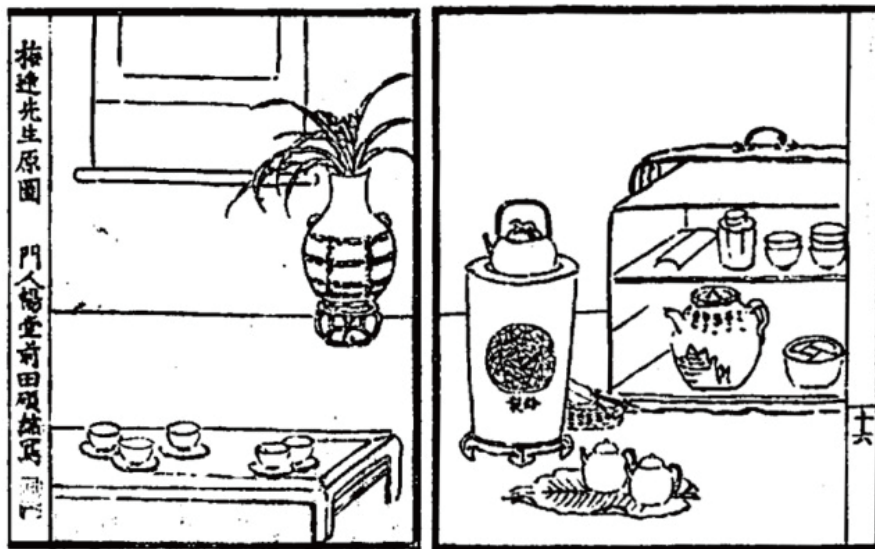


図5 古銅圓絡壺（『茗讌品目』山本梅逸, 1852年）

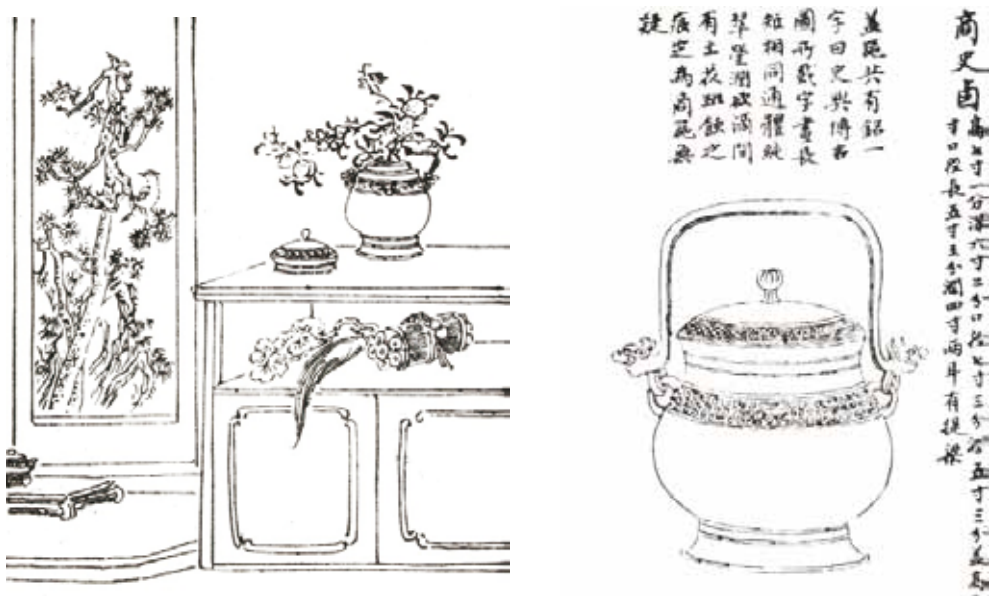
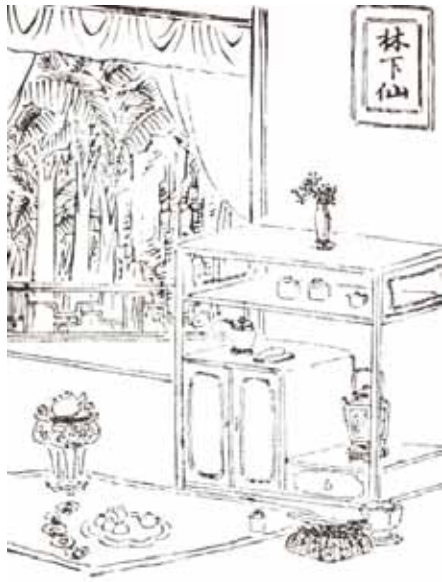


図6 第一席 商史卣（『青湾茗讌図誌』山中簪篁堂, 1875年）



銅色保傳世古
紋柱分明毫
無雜飾痕其
形與西清古鑑
中所載周畢
鼎大同小異

古銅鼎 有雙龍夔龍高五寸六分深三寸六分耳高一寸三分口徑
五寸九分腹圍一尺八寸



腹裏銘

七尺五寸
山陽
山

图7 第一席 古銅鼎 (『青湾茗讌図誌』山中簪篁堂, 1875年)



图8 左：第三席 水銀銅尊 右：第七席 銀銅饗饗雲雷紋壺
(『澗江茗讌図録』山中簪篁堂, 1909年)



周乳犀白



周漆器托盤食器管紋匣



漢鸚鵡尊

图9 左：虎卣 中央：象文兕觥 右：鸚鵡卣 (『角山簪篁薦事図録』山中吉郎兵衛, 1922年)



図10 第九席 銅器陳列（『昌隆社記念茗讌図録』井上熊太郎，1926年）

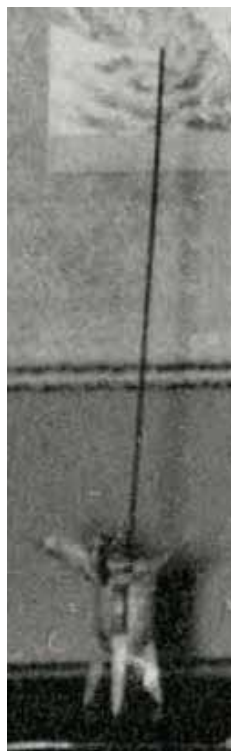


図11 煎茶飾として用いられた殷周青銅器
 左：第十二席 周銅魯公觚 中央：第十三席 漢銅爵 右：第十四席 漢銅伯和匜
 （『昌隆社記念茗讌図録』井上熊太郎，1926年）